

第16回清水町みらい会議要旨

○開催日 令和5年11月30日(木)

○会場 清水町役場4階 第1会議室

○出席者(委員)

- ・岩崎 清悟 座長 (静岡ガス株式会社 特別顧問)
- ・中山 勝 副座長 (一般財団法人企業経営研究所 常務理事)
- ・植田 勝智 委員 (ファルマバレーセンター センター長)
- ・川村結里子 委員 (株式会社結屋 代表取締役)
- ・長倉 一正 委員 (有限会社長倉書店 代表取締役)
- ・三船美也子 委員 (一般社団法人日本親子体操協会 理事)
- ・矢嶋 敏朗 委員 (日本大学国際関係学部 国際総合政策学科 准教授)

議題：清水町の文化力の向上と、これを活用したまちづくりの推進について

※ 事務局から、令和5年度における町の文化事業実績について説明した。

1 町の文化事業の現状等について

- ・ 清水町出身の演奏家によるコンサートを実施しており、特に小学校で行う子ども向けの事業は好評である。
- ・ 現在、町として様々なジャンルの文化事業を実施しているが、町としてどこに力を入れているか、他の市町と違うところはどこかということが明確に出てくると良い。
- ・ 各種事業の予約方法に電子申請を検討してはどうか。参加人数だけでなく、申込者の性質やリピーターなどの把握が可能となる。
- ・ 町事業の参加者数について入場料の高低で比較すると、入場料の高い事業の方が参加者の多い傾向にある。これは、本物志向があるということの表れではないか。本物に触れることのできる機会を増やしていけると良い。
- ・ 文化力を高めるためには、本物を見せることや、聴かせることが大切である。本物に触れることにより、本物のレベルを目指し、追いつこうとする方が地域から出てくるとさらに文化は広がっていく。

2 住民主体の文化事業について

- ・ 泉のまちインストラクターなどの制度を活用しながら、町民が講師となるなど地域の「人」に着目し、互いに学びあい、教えあう機会が増えていくことで、町の主催ではなく住民同士で文化力の向上につながるような動きが出てくると良い。

- ・ 共通の趣味を持った方々が活動し、コミュニティを形成していく中で会場が必要になると思う。そういった場所の提供を交流センターだけでなく地区の公民館を活用してもらうのも良い。

3 新規事業について

- ・ 文化には、食や生活、スポーツなど様々なものがある。今まで町の事業として行っていない文化を考えることで、新しく事業に関わる方が増え、新しい事業が生まれる。
- ・ 新しい事業に参加することで、新しいコミュニティが形成される。参加後に交流できる場のセッティングにより、次につながるような仕組みづくりができると良い。
- ・ 時代とともに人の興味・関心は移り替わることから、どれだけ新しい事業が展開されているかということが重要である。時代に沿った、子どもたちが興味を持つ内容などを提案してほしい。
- ・ 大学の役割の一つに地域貢献がある。大学教授を講師とすることで、参加者と意見交換を行うなどしながら住民の興味のレベルに合わせた講座も可能であるため、活用してはどうか。
- ・ 夜の柿田川公園を活用して、ライトアップしながら音楽のイベントなどを行っても良いのではないか。町民だけでなく町外の方々も参加しやすく、人が集まるイベントになる。

4 食×文化事業の展開について

- ・ 単なる鑑賞だけでなく、それらを題材として感想を話し合うなどまでが「文化的生活」であると記している本がある。文化そのものを素晴らしいと感じるだけでなく、その後に思い出を共有できる環境の提供として、食を絡めていくと良いのではないか。
- ・ 文化事業に併せて、出店を募って飲食ブースを設置してはどうか。文化事業に参加しない方も来場し、町の事業を知るきっかけになるとともに、今後実施する事業の告知を行っておくことで、事業に参加するきっかけにもなるかもしれない。
- ・ 出店を依頼するには、ある程度事業そのものに集客力がないと協力していただけない可能性がある。レストランなどの店舗を会場とすれば、事業への興味が高まるとともに、店舗の経営者・顧客の力を借りながら事業の周知を行うこともできる。

5 事業の発信について

- これまで事業に参加したことのない方々は、興味のあるコンテンツがないことや、事業の情報が行き届いていないことが考えられる。こうした課題を解消しながら、清水町の文化振興への取組を感じてもらえるような策が必要である。
- 事業が単発で実施されており、連続性やテーマ性が伝わらない。一定期間、町内で実施される文化的なイベントを、食・スポーツ文化などカテゴライズしながら見える化して発信することで、日頃情報が行き届かない人たちにも伝わるきっかけになるのではないかな。
- 短期間に集中して様々な取り組みを行うのは良い。自分の関心あるものに参加してみようという意欲につながるとともに、その後の活動の起爆剤にもなる。
- 目玉となる事業や単年度や複数年にまたがるテーマなどを設定し、特色を押し出すことで、より多くの方に興味を持ってもらえるきっかけになるのではないかな。
- 新たに大きな事業を行うだけでなく、現在も多方面にわたる事業を実施していることから、今ある事業をしっかりと見える化することで、清水町は文化芸術事業に力を入れているという認識が広がっていくのではないかな。

6 官民連携について

- 文化事業に企業が参入することで、コーディネートではなく、創造性を働かせたプロデュース力により、新しい視点が生まれる。
- 音楽コンサートなどの事業には多大な費用がかかり、チケットを販売してもなお赤字となってしまう現状があり、公や民間の力が必要となる。
- メセナ（企業による文化芸術活動に対する支援）として社会貢献に積極的に取り組む企業が増えている。企業の希望も取り入れながら事業を進めることで、町の予算だけでなく企業からの支援を受けることも可能となる。
- 例えば、清水町で実施したいイベントをテーマとして民間の方を対象としたコンテストを行い、コンテストで優勝した事業を民間の方が行うために、ガバメントクラウドファンディングを行う。このように、単に町が事業を主催するのではなく、民間が実施する事業の資金を町が協力して集めるという方法もある。
- 町内には、民間が実施する事業も多くあると思う。それらについても、町が情報をまとめて発信することで、民間の文化事業を後押しし、文化レベルを上げていくための下支えになる。

7 子どもに対する文化事業について

- 子どもの頃に、本物の文化を見て、聴くことができることが重要であり、その経験が文化の土壌をつくる。この子どもたちが成長していくと、自然と文化を楽しむようになっていくため、子どもたちが本物に触れる経験の仕掛けづくりが必要ではないか。
- 全国各地でコロマガ（こどもローカルマガジンの略）プロジェクトが起こっている。地元の地域資源、清水町であれば、町内企業や柿田川などを取材し、雑誌を作成するための写真撮影、編集及び構成をプロの方と一緒に行うものであるが、文化をどのように醸成させていくかということを考えるには、子どもの頃から町の状況を知ることや、こうした体験が重要となる。
- 地域産業を理解する観点から工場見学を行っているところがある。町の発展に寄与するものづくり文化を知る良い機会となる。また、子どもたちに参加していただき、その企業の製品を活用したものづくり体験ができれば、ものづくり文化に対する理解が深まる。